

2014 年 8 月

両親の在宅介護始末記

先日、満 100 歳を迎えた母が亡くなり、ようやく両親の介護が終わった。思えば、大変なこと辛いこといろいろあったが、最後は二人とも在宅で、静かに看取ることが出来たのがなによりだった。

次は我が身……。これを思うと心が寒い。介護のインフラは昔に比べ良くなったとはいえ、まだまだ医療や介護保険制度の将来は不安がいっぱい。介護も「在宅寝たきり」となると、家族の肉体的精神的負担は筆舌に尽くし難い。子供たちにもあまり世話をかけたくない。結局のところ、自らが寝たきりにならないよう、呆けないように心がけるしかない、と改めて痛感した次第です。

父は 20 年ほど前、当時の痴呆症で大変苦労した。まだ介護保険もなく、施設も治療方法も確立されていない時代。不思議な病に対する手探りの壮絶な在宅介護が 5 年ほど続いた。

その介護記録を単行本にまとめ自費出版したところ、新聞や雑誌に取り上げられ、ある自治体や介護団体から講演依頼が飛び込んできたりして、思わぬ体験をさせてもらった。それほど当時の痴呆症介護は未知の世界だった。

その父が亡くなって 20 年、こんどは母の介護がやってきた。父ほどではないが、昼夜の徘徊に悩まされた。元気な分、目が離せなかった。

ただこの 20 年で介護のインフラは様変わりした。おかげで施設や医療など介護保険制度のサービスを最大限利用させてもらった。

100 歳まで元気に毎日デイサービスに通っていたが、年齢には勝てなかったようだ。ソファから立とうとして転んで足腰を打ち、動けなくなってしまった。やっと病院につれていったが、もう骨がぼろぼろ状態ということで、医者から見放されてしまった。そしてその日から壮絶な寝たきり介護がスタートした。

担当のケアマネにお願いし、まもなく介護ベッドが運び込まれ、介護ヘルパー、訪問看護師、往診の医師、訪問入浴と、体制が整った。

当然これだけでは足りない。妻はおむつ交換、私は三度の食事の介助に加わった。介護は土曜も日曜もない。毎日スタッフが入れ替わり出入りするため、家も長時間空けられない。今まで以上に自由な時間がなくなった。

最大の難関はおむつ交換。1 日最低 3～4 回替えねばならない。意外と力が要る。妻はすぐ腰を痛めてしまった。ヘルパーは手慣れたもの、便の出が悪いと指を入れてほじくり出す。家中臭気がただよう……。

そんな介護も 3 カ月が過ぎたころ、訪問入浴のあとしばらくして、風邪をひいたのか、痰がからんだ咳をしだした。看護師に吸引機で痰を吹き出してもらい、その後楽そうに眠ったので安心していましたが、翌朝冷たくなっていた。眠ったままの自然で安らかな最期だった。

葬儀も済ませほっとする間もなく、こんどはやっかいな事後処理が待っている。例えば年金停止の手続き。役所で除籍抄本や住民票を取り寄せ、わざわざ年金事務所に出席かねばならない。役所では除籍手続きに実働 7 日かかる。なんで 7 日もかかるのか。役所への死亡届が年金停止に連動してしかるべきと思うが。

郵便局の通帳解約もしかり。わずかな残高でも、相続やらなにやら書類を書かされる。他に生命保険や相続等あればその手続きも厄介。もしもの時あわてないように、元気のうちにいろいろ整理しておかねばならない。

今年度から介護制度の料金が一部改定され、とくに在宅医療の報酬は大幅アップした。早晚保険料アップにつながるだろう。一方現場の職員スタッフの給与水準はまだまだ低く、人材確保が大変のようで、なかなか末端の待遇改善が進んでいない。裏で甘い汁を吸っている人が大勢いるような気がしてならない。

いずれにしても、行政にばかり頼ってはいられない。集団的自衛よりまずは個人的自衛。両親の介護から「呆けたらあかん！」を身をもって体験した次第。せいぜい健康長寿に心がけたいと思う。